

令和4年度佐世保市『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』アンケート調査に関する報告書

門田 理世 (西南学院大学大学院) 中ノ子 寿子 (西南学院大学大学院生)
岩淵 善道 (西南学院大学大学院生) 増田 吹子 (西南学院大学大学院生)
佐世保市幼児教育センター

アンケートの結果概要【本文中の参照箇所】

- 赤ちゃんの保護者は、参加した全員が事業への満足感をもっていた。【p3】
- 赤ちゃんの保護者は、本事業での交流は、我が子にとっても、自分自身にとっても、小学生にとっても日頃ふれあえない相手と関わる貴重な機会だと考えている。【p3-5】
- 同じ体験をしても、それぞれの保護者が感じる事業の意義には、我が子や保護者自身の経験に加え、小学生とふれあうことや小学生の育ちへの貢献など多様な認識があった。【p3-4】
- 小学生の多くは日常生活で赤ちゃんとのふれあう機会が乏しいと感じており、事業での交流を貴重な機会と捉えていた。【p6】
- 事業前に赤ちゃんとのふれあいに対して忌避感を持っていた小学生の中には、事業を通して赤ちゃんに対する苦手意識が軽減された様子も見られた。【p6】
- 対面での交流事業を体験した保護者の全員が、次回参加するとしたら同じく対面での交流を希望すると回答した。【p7】

I. はじめに

佐世保市は平成27年度より、佐世保市幼児教育センターにおいて『赤ちゃんふれあい(いのちを育む)事業』(以下、『赤ちゃん事業』)を実施している。本事業は子育て支援啓発事業の一環として、参加する保護者が①親としての喜びを感じる、②自分の子育てを振り返る、③自分の子どもの成長や将来をイメージする、④小学生とかかわることで地域の一員としての存在を意識することを目的とする。また、参加する小学校の児童(以下、小学生)にとっては①いのちの大切さ・尊さ・不思議さ、②相手を思いやる気持ち、③自分の家族(親)との関係を考えるきっかけ、④親の思いを知る、⑤将来の子育てを体験する機会となることを期待している。佐世保市教育委員会は、学校・地域・家庭が連携していのちの大切さについて考えるため、毎年6月を「いのちを見つめる強調月間」、6月1日を「いのちを見つめる日」と定めており、本事業はその取り組みにも寄与するものである。

例年、本事業は小学生と赤ちゃん、その保護者が直接ふれあう対面方式で行われてきたが、新型コロナウイルス感染症流行の影響を受けて令和3年度は小学生と赤ちゃん、その保護者をオンラインでつなぎ交流が行われた。今年度は、参加する保護者や赤ちゃん、小学生が直接ふれあう経験を保障できるような事業形態が模索され、1グループあたりの小学生数を減らしたり消毒を徹底したりする等の感染対策を講じながら、対面での交流を実施した。以下、今年度の『赤ちゃん事業』及び関連事業の『おおきくなったね』に参加した赤ちゃんの保護者と小学生、それぞれの立場から事業に意義を検証した結果を報告する。

II. 調査の概要と分析手法

以下、『赤ちゃん事業』と『おおきくなったね』の両事業の概要と調査・分析対象について記す。

1. 事業の概要と分析対象

(1) 『赤ちゃん事業』について

今年度6月に行われた『赤ちゃん事業』は、普段から幼児教育センターの子育て支援広場を利用している保護者とその赤ちゃん、他の支援センターからの紹介を受けたりホームページを見て申し込んだりした保護者とその赤ちゃん延べ30組(うち6月10、17、24日の3回参加した親子2組、3回中2回参加した親子6組)、木風小学校6年生38名の中から欠席者を

除く37名、白南風小学校5年生43名の中から欠席者を除く42名が参加した(表1)。小学生は、校長先生、担任、養護教諭による講話や妊婦の方の体験談の紹介、赤ちゃん人形を使った抱っこの練習といった内容の授業を通して、胎児期の様子や、生後の成長発達、赤ちゃんとふれあう際に気を付けること等について事前に学習している。事業当日は、小学生5~6名と親子2組が1グループとなり、小学生が赤ちゃん(おおむね3か月~1歳2か月)の遊ぶ様子を観察しながら、保護者から子育てや赤ちゃんの話を聞く形で交流が行われ、小学生が玩具で赤ちゃんをあやす、短時間ではあるが赤ちゃんを抱かせてもらう等の場面もあった。また、本事業は佐世保市幼児教育センターが運営しており、交流ではセンター職員と地域ボランティアスタッフがファシリテーターとして小学生と保護者をつなぐ役割を担っている。

表1. 本事業の実施状況

	日時	参加者数	
		親子数	小学生数
赤ちゃん事業	6/10(金) 10:35~11:20	13組	木風小学校 6年1組 (37名)
	6/17(金) 9:45~10:30	8組	白南風小学校 5年1組 (21名)
	6/24(金) 9:45~10:30	9組	白南風小学校 5年2組 (21名)
おおきくなったね	11/22(火) 9:45~10:30	8組	白南風小学校 5年1組 (17名)
	11/25(金) 9:45~10:30	6組	白南風小学校 5年2組 (21名)
	11/28(月) 9:45~10:30	12組	木風小学校 6年1組 (34名)

【分析対象】事業に参加した保護者、小学生に事業の事前・事後でアンケート調査を実施した(報告書末資料参照)。『赤ちゃん事業』では、事業に参加し、事前・事後アンケートが揃っている保護者延べ30名と、小学生72名を分析対象とした。

(2) 『おおきくなったね』について

11月に行われた『おおきくなったね』では、上記『赤ちゃんふれあい事業』と同じ木風小学校6年生34名、白南風小学校5年生48名(どちらも欠席者を除く)と親子延べ25組(うち11月22、25日もしくは28日の2回参加した親子5組)が参加し、対面で交流を行った(表1)。参加した親子のうち延べ17組は6月の『赤ちゃん事業』にも参加しており、8組が『おおきくなったね』からの新規参加者であった。事業の内容は『赤ちゃん事業』と同じ流れて実施され、小学生は6月よりも月齢の高い赤ちゃん(おおむね9か月~1歳7か月)と交流を行った。

【分析対象】『おおきくなったね』に参加し、事前・事後アンケートが揃っている保護者延べ25名と、小学生70名を分析の対象とした。

2. 分析の方法

アンケートの中で選択肢による回答は集計をし、自由記述による回答は、回答内容を表すコードを付して、抽象度がより高いコード・カテゴリに分類していく質的分析を行った。以下、オープンコードを<>、焦点コードを[]、カテゴリを[]、アンケート本文の質問および選択肢を《 》、原文の回答を「」、回答の件数やコードの事例数を()で表す。

Ⅲ. 調査結果および考察

以下、『赤ちゃん事業』と『おおきくなったね』に参加した赤ちゃんの保護者・小学生のアンケート調査結果および考察を記す。

1. アンケート回答者の属性

【保護者】『赤ちゃん事業』における保護者の年齢構成は、延べ30名中20代の保護者が10名、30代の保護者が20名で、3分の2が30代の保護者だった(表2)。参加した赤ちゃんの約5割が第1子(14名)で、第2子が11

表2. 『赤ちゃん事業』

保護者の年齢(延べ人数)	
保護者の年齢	人数
20代	10
30代	20
合計	30

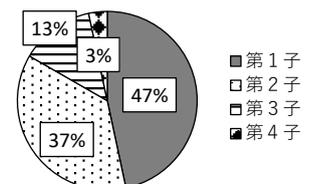


図1. 「赤ちゃんふれあい事業」に参加した赤ちゃんの出生順位

名、第3子4名、第4子1名であった(図1)。今回参加した保護者の約半分が第1子の子育て経験があり、半分は初めての子育て中ということになる。また、約半数となる17名

が事業への参加が2回目以上と回答していた。《日頃、小学生とふれあう機会があるか》という問いに対し、《ある》と回答した人が10名、《ない》と回答した人が20名で、3分の2の保護者は平素小学生とのふれあいがなかった。《子育てに対する不安や気になっていること》については、23名（76.7%）の保護者が《ある》もしくは《少しある》と回答しており、具体的な内容は＜病気やけが等の不安＞や＜成長や発達について＞等が挙げられた。

『おおきくなったね』における保護者の年齢構成は、延べ25名中20代9名、30代13名、40代3名と30代の参加が一番多く（表3）、父親の参加が1名あった。参加した赤ちゃんは15名が第1子（図2）で、保護者の40.0%は子育て経験があるが、60.0%は初めての子育て中である。《事業の参加回数》は、17名が今回で2回目以上、そのうち3名は4回目以上と回答しており、7割近くが事業に複数回参加している。《日頃、小学生とふれあうことがあるか》という問いに対し、11名（44.0%）が《ある》、14名（56.0%）が《ない》かと答えており、小学生と関わる機会のない保護者の方が若干多かった。子育てに対する不安や気になることが《ある》《少しある》と回答した保護者は11名で全体の44.0%、《ほぼない》《全くない》は13名（52.0%）、無回答が1名（4.0%）であり、具体的な不安の内容は＜発達や離乳食の進み具合＞や＜育て方が正しいのか不安＞等が挙げられた。

表3. 『おおきくなったね』
保護者の年齢(延べ人数)

保護者の年齢	人数
20代	9
30代	13
40代	3
合計	25

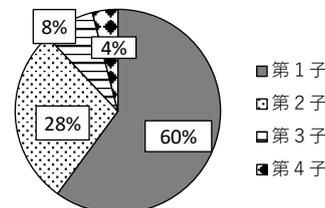


図2. 「大きくなったね」に参加した赤ちゃんの出生順位

《事業の参加回数》は、17名が今回で2回目以上、そのうち3名は4回目以上と回答しており、7割近くが事業に複数回参加している。《日頃、小学生とふれあうことがあるか》という問いに対し、11名（44.0%）が《ある》、14名（56.0%）が《ない》かと答えており、小学生と関わる機会のない保護者の方が若干多かった。子育てに対する不安や気になることが《ある》《少しある》と回答した保護者は11名で全体の44.0%、《ほぼない》《全くない》は13名（52.0%）、無回答が1名（4.0%）であり、具体的な不安の内容は＜発達や離乳食の進み具合＞や＜育て方が正しいのか不安＞等が挙げられた。

【小学生】『赤ちゃん事業』の事前アンケートに回答した73名の兄弟構成は、兄・姉がいる小学生が41名、弟・妹がいる小学生が30名、一人っ子が15名と、兄・姉のいる小学生が多かった。また、《これまでに赤ちゃんとのふれあったことがあるか》という問いに対しては、《ある》が59名（80.8%）と多くの小学生が赤ちゃんとのふれあいを経験したことがあると回答していた。

2. 保護者アンケートの結果及び考察

(1) 保護者が認識する事業参加の動機と事業の意義

『赤ちゃん事業』に参加した保護者に《この事業に参加しようと思った動機》について当てはまる順に3つ選んで回答する質問をすると、最も当てはまる選択肢として「我が子に色々な人とふれあってほしいから（7件）」「我が子にとっていい経験だから（5件）」等の回答が多く、『おおきくなったね』に参加した保護者にも同様の質問をしたところ、「我が子にとっていい経験だから（7件）」「赤ちゃんの時だけの経験だから（4件）」等の回答が多くなった。事業後のアンケートで《事業に参加してよかったか》を尋ねる質問に対しては、『赤ちゃん事業』では全員が《よかった》、『おおきくなったね』では24名《よかった》、1名《まあまあよかった》と回答している。これらの結果から、保護者は事業を通して我が子が色々な人とふれあい、この時期の子どもにとって意義のある経験をすることを期待して事業に参加し、参加した全員が事業への満足感をもったと言える。

次に、事業に参加して《よかった》、《まあまあよかった》と肯定的な感想を抱いた理由について自由記述を分析した結果、32のオープンコード、8つの焦点コード、4つのカテゴリに分類された（表4）。保護者が事業への満足感を感じた理由は、[小学生とふれあえたから] [小学生のことを知れたから] [小学生が我が子を大切に扱ってくれたから] [コロナ禍でも人とふれあいたいから]の4つの焦点コードから構成される[小学生との交流やふれあいへの喜び]に関する回答が最多となった。＜日頃関わる機会がない小学生とふれあえたから＞というオープンコードを含む同カテゴリの回答内容からは、保護者が事業を通して小学生とふれあい、小学生が我が子を大切にしてくれる様子を見たり、小学生の成長や考えについて知れたりしたことに事業の意義を感じていることがわかる。また、保護者が事業への満足感を持ったその他の理由としては、事業を通して出会った小学生の様子に癒されたり、小学生と我が子の交流をほほえましく感じたりしたという[ポジティブな思い・感情が喚起]されたり、事業の中で我が子の成長に気づき、将来の姿を想像できたという[我が子の成長過程や将来を考える機会]を得たりしたという[保護者が受けた影響・学び]を理由に挙げている回答や、[我が子が

事業を楽しみ、いい刺激を受けた]様子を見て[我が子にとっての事業の価値]を感じたという回答、<小学生に赤ちゃんや子育てのことを知ってもらう機会になった>ことや、<小学生に命について伝えたいと思えた>ことを喜び[小学生の育ちに貢献する意識]を挙げている回答等があり、保護者は実際に事業を経験する前は我が子にとって意義がある事業になることを期待して参加する機会が多いが、事業に参加した後は我が子だけでなく保護者自身にとっても意義がある事業だと感じたことに加え、小学生とふれあうことや小学生の育ちに貢献することにも喜びや意義を感じていると言える。このことから、我が子と一緒に小学生と交流をするという同じ経験をした保護者であっても、事業のどこに意義を感じ、自身の経験をどのように価値づけるのかは多種多様であると言える。保護者に《日頃小学生とふれあう機会があるか》という質問をしたところ、55名中34名が《ない》と回答していることも踏まえると、本事業は参加した保護者に平素ふれあう機会がない小学生との交流を提供することによって、保護者が我が子にとって価値がある経験だったと感じるだけでなく、地域の小学生とふれあうことやその小学生の育ちに貢献できることに喜びを感じることを促す等の多義的な価値を有する可能性が示された。

表4. 保護者が事業に参加して肯定的な感想を抱いた理由 (※一部抜粋)

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープンコード>
小学生との交流やふれあいへの喜び(43)	小学生とふれあえた(17)	日頃関わる機会がない小学生とふれあえたから(14) 小学生とふれあえたから(2)
	小学生のことを知れた(16)	小学生の成長を感じたから(6) 小学生の考えを聞いたから(6)
	小学生が我が子を大切に扱ってくれた(7)	我が子を可愛がってくれたから(5) 優しい・かわいい表情でふれあってくれたから(2)
	コトでも人とふれあいたい(3)	コトでも人とのふれあいは大切だから(2) コトでも交流が減っている中ふれあえたから(1)
保護者が受けた影響・学び(16)	自分にポジティブな思い・感情の喚起した(10)	小学生の様子に癒されたから(5) 子育て中の良い気分転換になったから(1)
	我が子の成長過程や将来を考える機会になった(6)	我が子の成長が感じられたから(4) 普段の育児をふりかえる機会になったから(1)、
我が子にとっての事業の価値(14)	我が子が事業を楽しみ、いい刺激を受けた(14)	我が子が小学生とふれあえたから(6) 我が子にとっていい刺激・経験になったから(3)
小学生の育ちに貢献する意識(8)	小学生の学びに貢献できた(8)	小学生に赤ちゃんや子育てのことを知ってもらう機会になったから(2) 小学生に命について伝えたいと思えたから(1)

また、《小学生にとって赤ちゃんやふれあうことはいいことだと思うか》を尋ねたところ、53名が《いいこと》、1名が《まあまあいいこと》と回答し(無回答1名)、全保護者が赤ちゃんやふれあうことは小学生にとって意義があると捉えていた。その理由を分析した結果、32のオープンコード、14の焦点コード、8のカテゴリに分類された(表5)。保護者がそのような考える理由としては[異世代の人とふれあえる]、[命や他者を大事にできる]、[自分の育ちや将来について意識できる][実

表5. 保護者が考える小学生にとっての事業の意義(※一部抜粋)

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープンコード>
異世代の人とふれあえる(19)	日頃関わりのない世代とふれあえる(16)	日頃関わらない赤ちゃんやふれあえるから(15) 他の世代との関わりが少なくなっているから(1)
	他の世代とふれあえる(3)	他の世代の子どもと関われるから(2) 同年代だけでなく、他の世代との交流ができるから(1)
命や他者を大切にできる(17)	人や赤ちゃんに優しくなれる(9)	自分より小さい人、弱い人に優しくなれるから(3) 今後赤ちゃんや接する時に大事にできるから(1)
	命の大切さについて学べる(8)	命の大切さを学べるから(7) 命を感じられるから(1)
自分の育ちや将来について意識できる(13)	自身の育ちをふりかえることができる(12)	自分の育ちを知るきっかけになるから(5) 自分も大事に育てられたことに気づけるから(4)
	自分の将来について意識できる(1)	将来自分が親になった時のことを考えられるから(1)
実体験から学べる(5)	実際にふれあうことで学べる(4)	実際にふれあわないとわからないことを学べるから(4)
	直接親と話すことで学べる(1)	子育て中の親と直接話すことで学べるから(1)

体験から学べる]等のカテゴリがあり、「我が子が小学生になった時、同じような経験ができたなら親としてすごくありがたい」という記述に表されるように、保護者は事業が小学生の自分より小さい世代の赤ちゃんと直接ふれあう貴重な場であり、事業での経験が他者に対する思いやりの涵養や、小学生自身のこれまでの育ちやこれからの将来を意識することにつながると考えていることが明らかとなった。

以上の結果から、保護者は事業が我が子にとっても、自分自身にとっても、小学生にとっても日頃ふれあえない相手と関わる機会を与えてくれる貴重な場であり、事業のどこに満足感を感じるのかは多様な認識があることが示された。このことから、平素の生活の中で自然発生的な異世代との交流が得られにくい現代だからこそ、事業で赤ちゃんや子育て中の親、小学生が出会う場を設け、異世代から多様な学びや気づきを得る機会を保証することの重要性が示唆された。

(2) 保護者にとっての複数回事業を行う意義

『おおきくなったね』に参加した保護者25名のうち17名は『赤ちゃん事業』にも参加しており、「6月と比較して小学生に変化があったか」という質問に全員が「あった」と回答した。「どのような点が変わったか」を尋ねた質問への回答を分析したところ、10のコードから2つのカテゴリが抽出された(表6)。なお、回答数が少ないためこの項目に関してはコードとカテゴリのみを抽出している。

表6. 保護者が認識する6月と比較した11月の小学生の変化 (※一部抜粋)

[カテゴリ]	<オープンコード>
赤ちゃんや保護者に対する態度、接し方の変化(15)	6月よりも積極的に赤ちゃんといふれあっていた(7)、6月よりも赤ちゃんの扱いに慣れてきた(3)、赤ちゃんといふのが上手になった(2)、笑顔がよく見られた(1)、赤ちゃんに対する対応がやわらかくなった(1)
小学生の外見や内面の変化(6)	外見が成長していた(2)、思春期らしくなっていた(2)、思ったことを表現できない様子が見られた(1)

[赤ちゃんや保護者に対する態度、接し方の変化]のオープンコードを見ると、保護者は6月に比べて小学生の赤ちゃんや保護者に対する態度が積極的になり、赤ちゃんとの接し方に慣れたり対応がやわらかくなったりしたと感じており、小学生が事業でのふれあいを通して赤ちゃんとの関わり方を学んだことに気づいている。また、[小学生の外見や内面の変化]からは、小学生の外見が成長したと感じる一方で、少数ではあるが「思春期にさしかかっているのかなと感じた。思っていることをなかなか表現できない子も出てきていた」という記述のように、内面の変化に気づく記述もみられた。このような読み取りからは、保護者が6月と11月という2時点で継続して事業に参加したことで小学生の様子を比較でき、小学生の半年間の変化や思春期の揺れ動く心に気づく視点を得たことが推察される。継続して事業に参加した全員が半年後の小学生を見て何らから変化に気づいていることは、翻ってみればそれだけ事業を通して保護者が自分自身の子どもではない地域の小学生に対する理解を深めていることを示唆している。自然発生的な小学生とのふれあいが得られにくい保護者の現状を考えれば、乳幼児を育てる保護者は我が子が小学生になった時の様子や、小学生の我が子に接する自分のイメージを持っていない可能性もある。したがって、『赤ちゃん事業』から期間を空けて『おおきくなったね』を行っていることは、赤ちゃんを育てている保護者が小学生の半年間の様子を比較して実態を捉えることができるきっかけとなり、我が子の成長や将来のイメージを得ることで見通しがもてるようになるという子育て支援につながっていることが推察される。また、参加した保護者が自身の子どもだけでなく地域の小学生の育ちを理解する視点を得ていることは、佐世保市全体での地域による子育て支援にとっても意味があることだと言える。

3. 小学生アンケートの結果及び考察

(1) 赤ちゃんとのふれあいに対する小学生の期待と苦手意識の変化

事前アンケートでは「赤ちゃんに会えるのが楽しみか」の質問に対し、「楽しみ」68.1%、「まあまあ楽しみ」18.1%、「あまり楽しみでない」4.2%、「楽しみではない」1.4%、「分からない」8.3%と赤ちゃんとのふれあいを敬遠する小学生

も一定数いたが、事後アンケートで《赤ちゃんを見ることができてよかったか》と尋ねると、全員が《よかった》と回答した。よかったと思う理由として「赤ちゃんをだっこするきかいがあまりないから」といった赤ちゃんとふれあう経験の不足を挙げている回答が22.2%と最多であったことから、小学生自身が赤ちゃんとのふれあう機会の乏しさを自覚し、事業での交流を貴重だと捉えていることが示された。

次に、この事業がもたらす小学生の赤ちゃんへの意識の変化を検証するため、事業前には赤ちゃんに会うのが《あまり楽しみでない》3名、《楽しみではない》と回答した1名の計4名に注目した。《楽しみではない》と回答した1名の小学生は、「もったときになきそうだから。おとしそうだから」という理由で赤ちゃんを敬遠していたが、事業後は赤ちゃんを見ることができて《よかった》と満足していた。その理由に「赤ちゃんをだっこするきかいがあまりないから」と経験の欠乏を挙げていることから、赤ちゃんの扱い方の分からなさが忌避感につながっていた可能性が窺える。そしてこの小学生に《今後赤ちゃんやお母さんとふれあいたい》と尋ねたところ《ふれあいたい》と答えており、その理由を「かわいかったから」としていることから、ふれあいに肯定的な感情が芽生えていることが示されている。また、《あまり楽しみではない》と回答し、その理由のうち「自分より小さい子(年下)がにがてだから」と挙げていた1名の小学生においても、今後赤ちゃんとの《ふれあいたい》理由を「今日のふれあいがたのしかったから」と回答している。このことから、本事業が赤ちゃんとのふれあう機会を提供したことで、今後のふれあいの肯定的な意識変化をもたらしたと言える。

しかし他方で、《あまり楽しみではない》と回答した3名中2名の小学生については、事業後に赤ちゃんを見ることができて《よかった》と答えながらも、今後ふれあいたいかの質問について《わからない》と回答している。《あまり楽しみでない》理由について「泣くのがうるさそうだから」と挙げた小学生を見てみると、赤ちゃんを見ることができて《よかった》理由として「あまりこういうことはないから」と、交流の経験に希少性を感じていた。しかし、今後のふれあいは「自分でもわからないから」として判断を避けている。また、《あまり楽しみではない》理由を「赤ちゃんが苦手です。よだれがいや。」と答えたもう1名の小学生は、事業後に《よかった》理由を「赤ちゃんのかわいいところがよく分かったし、苦手だったけど、ちょっとは好きになれたと思うからです。」と回答しており、ふれあいを通して赤ちゃんへの好意的感情が芽生えていた。しかし、今後のふれあいに《わからない》とした理由は「コロナだし、ちょっと赤ちゃんが苦手だから、ふれあってもいいし、ふれあわなくてもいいからわからない。」と回答しており、一度の事業では小学生全員の赤ちゃんに対する苦手意識が払拭しきれない小学生がいることもわかった。その中でも、赤ちゃんへの好意的な感情をもつようになった小学生が複数名存在することから、この事業を通して小学生が赤ちゃんとのふれあう機会を提供することには大きな意義があると考えられる。

(2) 赤ちゃんとのふれあいがもたらした小学生の気づき

事業における学びを明らかにするために、《今日赤ちゃんやお母さんに会ってみて感じたこと、考えたこと》を尋ねた質問に対する自由記述を分析すると、60のオープンコード、14の焦点コード、6のカテゴリに分類された(表7)。小学生の回答は赤ちゃんや保護者に出会って「赤ちゃんをかわいいと思う感情」を感じたという情動面の気づきを挙げた回答が最多で、次に「赤ちゃんみんないろいろなところがちがった」など赤ちゃんの様子や「赤ちゃんの手足がめっちゃ小さかった」など赤ちゃんの体への気づきといった「赤ちゃんに対する気づきや学び」を挙げた回答が多かったこと。これらのことから、赤ちゃんとのふれあいは小学生にとって情動面・認知面の両面において変化をもたらしたことが示された。

表7. 小学生が赤ちゃんや保護者に会ってみて感じたこと、考えたこと ※一部抜粋

[カテゴリ]	[焦点コード]	<オープンコード>
赤ちゃんをかわいいと思う感情(32)	赤ちゃんをかわいいと思う感情(22)	赤ちゃんをかわいいと思った(19)、赤ちゃんの小ささをかわいいと思った(3)
	赤ちゃんの行動をかわいいと思う感情(10)	赤ちゃんが遊んでいるところがかわいいと思った(5)、赤ちゃんの動きがかわいいと思った(2)
赤ちゃんに対する気づきや学び(31)	赤ちゃんの様子への気づき(18)	赤ちゃんの個人差を知った(4)、赤ちゃんによって好きなこと、嫌いなことが異なっていた(2)
	赤ちゃんの体への気づき(13)	赤ちゃんの柔らかさを感じた(7)、赤ちゃんの手足の柔らかさを感じた(2)、赤ちゃんの顔が保護者に似ていた(2)

IV.まとめと今後の課題

今年度は令和2年以降初となる対面での交流事業が実現された。まず、アンケートの分析結果から参加した保護者全員が事業に対する満足感を持っており、日頃交流のない小学生と関わることによって多様な意義を感じていた。また、6月と11月の事業に継続して参加した保護者は、半年間の小学生の心身の変化に気づいており、複数回事業を行うからこそ小学生への理解を深め、我が子の成長に見通しを得ることができたことが窺えた。さらに、小学生にとって事業は日頃関わりのない赤ちゃんとふれあえる貴重な場であり、小学生の情動面・認知面双方において変化をもたらす効果があることがわかった。事業前に赤ちゃんとふれあいを敬遠していた子どもの中には、事業を通して赤ちゃんへの苦手意識が軽減された様子も見受けられ、事業に参加することで小学生に多様な学び・変化があったことが示された。以上の結果から、本事業は保護者・小学生双方にとって様々な意味や意義がある互恵性を兼ね備えた経験となったことが明らかとなった。参加した保護者に《次回参加する場合オンラインと対面のどちらを希望するか》を尋ねたところ、『赤ちゃん事業』に参加した保護者は100%、『おおきくなったね』の保護者は83.3%が対面での事業を希望しており、オンラインを希望する保護者はいなかった。その理由としては実際にふれあう経験を重視する回答が多くあり、令和3年度のオンライン事業に対する調査からはオンライン交流にも一定の意義があることが示されたが、対面での交流を経験した保護者はオンラインよりも対面での交流に意義を感じていることがわかった。今後も可能な限り対面での交流が望まれる。

次に、保護者・小学生双方に共通する特徴として、異世代との交流が乏しいことを感じており、赤ちゃんや小学生とのふれあいに価値を見出す傾向がみられた。この傾向が生じた要因を特定することはできないが、保護者・小学生双方にコロナ禍によるふれあい経験の不足に関する記述が散見されること、新型コロナウイルス流行後に人との接触が減ったと感じている小学生が全体の3分の1いることから考えると、人との接触に制限がある昨今の事情を反映した可能性もある。自然に異世代との交流が生まれにくい現状に鑑みても、『赤ちゃん事業』及び『おおきくなったね』で意図的に小学生や赤ちゃん、保護者が出会う場を設ける重要性は増しているだろう。

また、保護者アンケートを概観すると、「高校の時ふれあい事業があったので、親の立場になって参加してみたいと思っていたから」という事業の参加動機や、「私自身も小学生の頃、幼稚園の園児さんと交流した事があるがとても印象に残っている」という小学生にとっての事業の意義への回答があり、学生時代に赤ちゃんとふれあう経験をして意義を感じた子どもが成長し、今度は親として赤ちゃんと小学生のふれあいに貢献する意識から事業に参加しているという特徴がみられた。『赤ちゃん事業』は平成27年度開始の事業であり、今後小学生の時に赤ちゃんとふれあう経験をした子どもたちが大人となっていく。事業の継続は、佐世保市で事業に参加して赤ちゃんとふれあう意義を感じた大人が増加することを意味しており、このことは佐世保市の子どもへの育ち・子育て支援にとって何らかの意味を持つと推察される。今後も事業の継続が望まれるとともに、事業の継続が佐世保市にどのような長期的効果をもたらすのかについても検討していきたい。

以上